

琉球大学学術リポジトリ

消費者市民育成を目指す練り直しの場面を取り入れた家庭科の授業提案

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教職センター 公開日: 2024-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土屋, 善和, 岩谷, 千晴 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002020275

消費者市民育成を目指す練り直しの場面を取り入れた家庭科の授業提案

土屋善和(琉球大学教育学部)・岩谷千晴(琉球大学教育学部附属中学校)

Proposal for a home economics lesson that incorporate reviewing scene aimed at developing Consumer Citizenship.

Yoshikazu TSUCHIYA Chiharu IWAYA

1. 研究の背景及び本研究の目的

近年、急速に変化する社会において、支払い方法や販売方法、さらに商品として提供されるモノやサービスは多様化しており、消費生活はより複雑化してきている。そうした背景の中、2012年に「消費者教育の推進に関する法律」(以下、「消費者教育推進法」)が施行され、消費者教育の充実が図られてきた。同法における「消費者教育」とは、「消費者の自立を支援するために行われる消費生活に関する教育(消費者が主体的に消費者市民社会の形成に参画することの重要性について理解及び関心を深めるための教育を含む。)及びこれに準ずる啓発活動」を指している。つまり、今後の学校教育においても消費者市民社会の形成に関わる学習を展開する必要がある。

さらに同法によると「消費者市民社会」とは、「消費者が、個々の消費者の特性及び消費生活の多様性を相互に尊重しつつ、自らの消費生活に関する行動が現在及び将来の世代にわたって内外の社会経済情勢及び地球環境に影響を及ぼし得るものであることを自覚して、公正かつ持続可能な社会の形成に積極的に参画する社会」と定義づけられている。つまり、そうした社会を形成する消費者市民とは、社会を形成する一員としての自覚を持ち、社会や環境等に対する影響を考えて消費行動ができる人と捉えられるだろう。そして、消費者市民の育成のためには、まずは、自身の消費行動が社会や環境等に影響を与える「消費者」であるという自覚を芽生えさせることが重要となる。そのためには、生徒が日々の消費行動と社会とのつながりを十分に理解する必要がある。

家庭科では従来から消費者教育に関わる学習が展開されてきた。そして、消費者教育推進法の影響も受けつつ社会状況を踏まえ、2017年・2018年の学習指導要領の改訂では、消費生活領域の指導事項がより一層充実した。中学校学習指導要領解説技術・家庭編では、本領域の学習について、「消費者市民社会の担い手として、自覚をもって環境に配慮したライフスタイルの確立の基礎を培うこと」と明記されている。さらに指導事項をみると、C消費生活・環境の「(2)消費者の権利と責任」では、「ア 消費者の基本的な権利と責任、自分や家族の消費生活が環境や社会に及ぼす影響について理解すること」や「イ 身近な消費生活について、自立した消費者としての責任ある消費行動を考え、工夫すること」が指導事項として示されている。ここから、家庭科教育では消費者が社会や環境に与える影響の理解を促し、自立した消費者としての責任ある行動ができるようになるための指導が求められており、消費者市民の育成を目指していることがわかる。そこで本研究では、中学校家庭科において、消費者市民育成に向けて、2つのポイントに着目をして授業を検討することとした。

1つ目は社会や環境に影響を与える消費者としての自覚、つまり「消費者とは自身の行動が社会に影響を与えることで、社会を形成する一端を担っている存在である」という「消費者」としての自覚を芽生えさせることである。そのためには、自身の消費行動が与える社会や環境への影響

と自身の生活と地域や社会、環境との関係を理解する必要がある。つまり、社会や環境へ配慮した行動を自分事として捉えることが重要となる。

2つ目は、批判的思考を働かせることである。批判的思考は、「何を信じ行くかの決定に焦点を当てた合理的で省察的な思考」(Ennis,R.H. 1985)とされている。また、道田(2004)は、批判的思考の論考を整理した上で、「良い意思決定が批判的思考的なもの」であり、「良質の意思決定と批判的思考とは同種のもの」と述べている。したがって、消費行動におけるよりよい意思決定のためには批判的思考を働かせる必要があると考えられる。さらに、楠見(2016)は、市民リテラシーと批判的思考との関係を示した上で、「個人が批判的に考えることによって、人生のなかで次々と直面する個人的、社会的問題において、より良い決定を積み重ねて幸福な人生を歩み、より良い社会を築くことができる」と述べている。以上より、社会を形成する一員としての自覚を持ち、責任ある行動を考え実践できる消費者市民となるためには、批判的思考を働かせることが必要であると考えられる。

そこで、自身の生活や消費行動と社会・環境とのつながりについて理解を促し、かつ批判的思考を働かせる学習として、「練り直し」の場面に着目した。道田(2018)は、批判的思考の育成につながると考えられた授業実践を分析した結果、批判的思考を育成するための6つの観点を見出した。その1つが「練り直し系」である。「練り直し系」とは、「最初の自分の考えを何らかの方法によって見直し、よりよいものに高める学習」であり、見直す観点は、他者の良い点や他者からのアドバイスなどが挙げられている。つまり、一度まとめた意見を他者の意見等をもとに再検討する場面が、批判的思考の育成につながると考えられる。また、練り直しの学習活動では、様々な情報を入力・整理・精査しながら自身の考えや意見を再考することになる。したがって、練り直しの過程を通じて考える対象へのより深い理解を得られることも期待できるだろう。

そこで、本研究では、「練り直し」の場面に着目した家庭科の授業を試行的に実施することとし、消費者市民の育成を目指す家庭科学習への示唆を得ることを目的とした。

2. 研究方法

実施時期は2023年2月から3月で、3時間構成で実施をした(図1)。実施校は沖縄県内の大学附属中学校で、対象は2年生4クラスである。授業分析については、授業後の質問調査を分析・考察した。なお、調査はGoogleフォームを利用した。

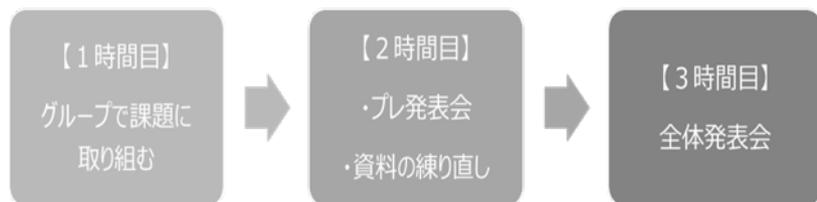


図1 授業の流れ

3. 授業概要

【課題】
小学生がエシカル消費、フェアトレード商品の購入、SDGsに関わる行動が自分の生活をよりよくすることに納得できるようなスライドを用いた3分の説明を考えてください。

【課題のポイント】

- ・小学生が納得し理解できる説明を考えてください。
- ・自分のよりよい生活とのつながりがわかるような説明を考えてください。

図2 本時の課題

(1) 1時間目

1時間目の授業では、「エシカル消費」「フェアトレード」「SDGs」を取り上げ、「小学生がエシカル消費、フェアトレード商品の購入、SDGsに関わる行動が自分の生活をよりよくすることに納得できるようなスライドを用いた3分の説明を考えてください」という課題を提示した(図2)。ここで

は、隣接する附属小学校において小学生が、「エシカル消費、フェアトレード商品の購入、SDGsに関わる消費行動が、他人や社会のためにしていることで、自分の生活がもっと良くなるわけじゃない」という疑問を抱いているということから、小学校の先生から中学生に対して、それらの行動により自分の生活がよりよくなる説明をして欲しいという場面を設定した。中学生も抱きそうな疑問を設定することで、生徒自身の問いともなることを期待した。

単なる調べ学習では、生徒の深い理解や自身の生活及び消費行動と社会や環境とのつながりについて深く考えることはできない。そこで、本実践では、「小学生にわかる説明を考える」という課題を設定した。小学生が理解するためには、小学生でもわかる言葉でかみ砕いて説明をしなければならない。そして、かみ砕いて説明するためには、説明者である生徒自身がそれらの用語を十分に理解する必要がある。本課題に取り組むことで、生徒自身が実は自分も内容について知っていた気であった、あるいは改めて考えてみるとわからないことに気づき、それらの内容に対する疑問を抱くことにもなると考えた。そして、課題に取り組んでいる際に抱いた疑問を明らかにしていくことで、より深い理解が得られることを期待した。

また、「エシカル消費」「フェアトレード」「SDGs」をキーワードとした理由は、3つの行動が社会や環境に配慮した消費行動であり、生徒にとっても身近な消費行動でもあるため、これらについて深く考えることで、個人の消費行動と社会や環境とのつながりや影響を理解しやすいと考えたからである。さらに、本課題では、エシカル消費、フェアトレード、SDGsと自分のよりよい生活とのつながりを考えさせている。課題に取り組むことで、社会や環境に配慮した消費行動と自分の生活との関連に気づかせ、これらの消費行動を自分事として捉えられるようになることも期待した。こうした理解や気づきは、消費者市民としての自覚の芽生えにつながると考えた。

さらに、練り直しをする際には、まずは自身の考えをまとめた上で、さらに意見や考えを再度見つめ直さなければいけないという必要性を持たせることが重要となる。教師の発問に対してただワークシートに意見をまとめさせるだけでは、生徒が練り直す必要性をもつことが難しいと考えた。そこで、練り直しの素材ともするために、パワーポイント資料の作成をすることとした。

本時では、3つの用語を3グループずつに割り振り、1グループ1つの用語に対して説明を考えてもらうようにした(図3)。各クラス9つのグループであったため、1クラス1つのキーワードを3つのグループが担当することになった。



図3 パワーポイント作成の様子(1時間目)

(2) 2時間目

2時間目は、3つの用語をそれぞれ担当したグループを1つずつ集めて、プレ発表会を実施した(図4)。ここでは、自身が担当した内容についてあまり理解をしていないことが想定されるグループに向けて発表をすることになる。生徒はクロームブックを使用して、作成したパワーポイント資料を他のグループの生徒と共有しながら発表を行った(図5)。



図4 プレ発表会の様子(2時間目)①



図5 プレ発表会の様子(2時間目)②

また、発表を聞く際には、課題の条件ともなっている「小学生が納得し理解できる」「自分のよりよい生活とのつながりがわかる」という観点で発表内容を確認し、発表に対する疑問やアドバイスを付箋に記入させた(図6)。付箋の内容には、自分たちの生活とのつながりがあるかという点や小学生がわかるかという点において、疑問に感じたことやわからなかったこと、あるいは話した方がよい内容や情報に関するアドバイスを記入した(図7、8)。他のグループからの疑問やアドバイス、意見は発表者にとっては客観的な視点での評価となるため、これらの意見や疑問よりどのようなことが伝わりにくかったのか、わからなかったのかを把握することができる。つまり、客観的な視点での意見やアドバイスは、自分たちでは気づけなかったことに気づくためのきっかけにもなる。さらに、他の発表に対して疑問やアドバイスをする時には、発表内容に対して上記の2つの観点から批判的に捉える必要がある。つまり、疑問やアドバイスを考える際にも、生徒は批判的思考を働かせていると考えられる。

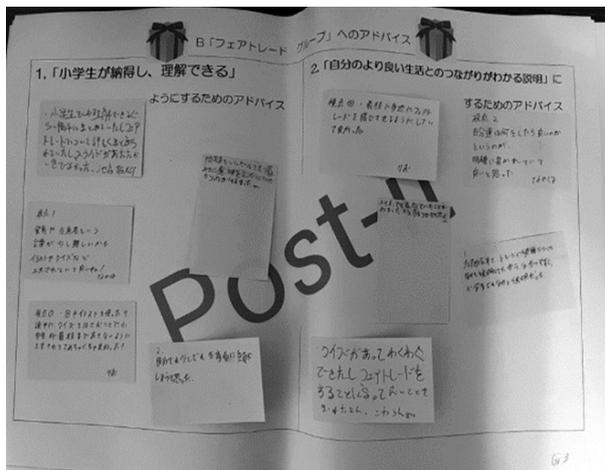


図6 発表に対するアドバイス

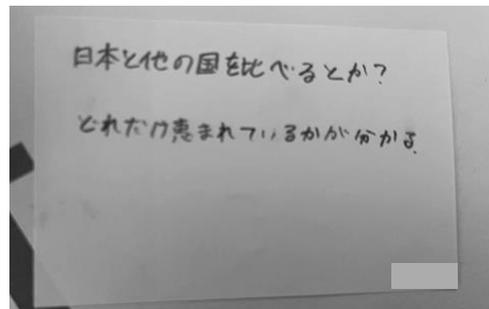


図7 生徒が記載した付箋①

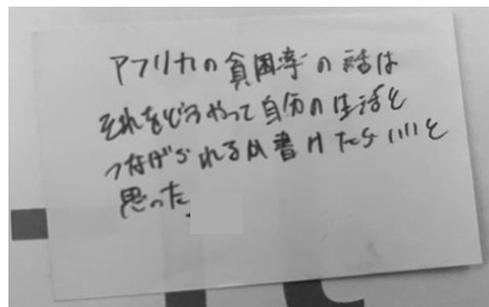


図8 生徒が記載した付箋②

授業の後半は、発表に対する他のグループからの意見や疑問、アドバイスをもとにパワーポイント資料を見直し、発表内容及び資料の練り直しをさせた。他者のコメントはもちろんだが、他のグループの発表内容や方法、実際に自分たちが説明をした際に感じたこと等を踏まえながら資料及び発表内容の

修正や加筆をすることになる。そうした複数の視点から発表内容や資料を再検討する中で、批判的思考が促されると考えられる。

(3) 3 時間目

3 時間目は、全体発表会を実施した(図 9)。小学生に自分たちのよりよい生活とのつながりを理解してもらうために、エシカル消費、フェアトレード、SDGs の概要だけではなく、例えばそれらに関係する社会的な問題や行動をすることによる消費者にとってのメリット、自分の生活への影響、実生活における具体的な行動等、グループごとに様々な情報が提示された。教師からはどのような情報を伝えるかは提示しておらず、内容は全てグループに委ねられていたため、同じ用語を担当したグループでも異なる内容の発表がなされた。



図 9 全体発表会の様子(3 時間目)

また、生徒は他のグループの発表を聞きながら、ワークシートにわかったことやポイントをまとめていった(図 10)。生徒は自身の担当以外のキーワードに関する発表を聞くことで、他の内容に関する情報や知識を得られるため、エシカル消費、フェアトレード、SDGs がそれぞれ関連しあっていることにも気づくことができると考えた。また、3つのキーワードについて、発表内容が異なる発表を3回

(自分たちが担当した内容については2回) 聞くことになるため、様々な視点からそれぞれの内容についての理解を深められる。さらに、ワークシートには自身と同じ用語を担当した別グループの発表についてもまとめさせるようにした。同じキーワードでも自分たちと異なる内容や視点が発表に取り入れられていることから、新たな気づきや発見につながり、担当した用語についてもさらなる理解が得られると考えた。したがって、発表を通して、エシカル消費、フェアトレード、SDGs の内容やそれぞれの関連について理解をすることで、自分の消費行動と社会とのつながりや、自分たちの消費行動が社会へ与える影響についての理解も深めることができる。

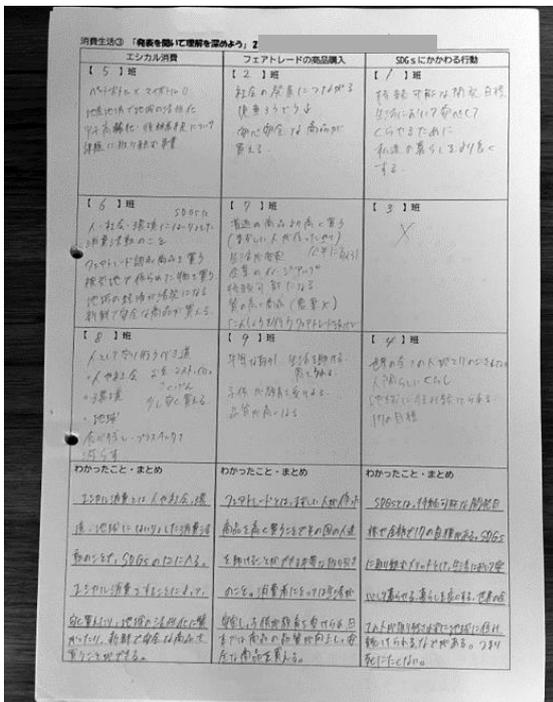


図 10 ワークシート

4. 結果及び考察

学習を通して生徒がどのような考えを持つようになったのかを把握するために、授業後に質問調査を実施した。質問調査に対する回答をもとに、本実践の成果について分析・考察することとする。

(1) 自分の生活と社会とのつながりに対する理解

質問調査では、生徒に「エシカル消費」「フェアトレード」「SDGs」が自分のよりよい生活につながると思うかを尋ねた。生徒の記述の一部を表1に示す。

表1 エシカル消費、フェアトレード、SDGsは自分のよりよい生活につながるか

エシカル消費	フェアトレード	SDGs
<ul style="list-style-type: none"> ・エシカル消費をすることで、人、地域、環境をより良くできる。<u>地域が良くなる</u>と自分たちもより良い生活になるから。 ・働く環境の改善、社会や家族を支えることができるため、つながっている。 ・なぜならエシカル消費とは、自分のためだけでなく社会のために行動し、環境にも良く、<u>自分が楽しく笑っているのは誰かが社会のために行動してくれた</u>からだと思う。 ・エシカル消費とは、自分のためだけでなく、今のだけかのために買って、その上で<u>未来の自分たちのため</u>にもなること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発展途上国の人々の生活を助けることにもつながり、<u>私たちが安心・安全な品質の高い物が手に入る。</u> ・フェアトレード商品を買うことで生活が安定し、安心安全な商品を買うことができます。また、経済的協力関係が安定し、<u>戦争や紛争が減り、私たちの生活もよくなり、メリットがある。</u> ・商品の質がいいものを買えたり、SDGsに参加できたりするから、地球のためになったり、<u>自分が金銭的にではなく豊かで充実した生活を送れる。</u>他人意識じゃなくて地球意識。 ・つながっていないと思う。<u>フェアトレードをして良くなるのは途上国の人とか会社のイメージとかにしかないから。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>現在にも未来にもつながっている</u>と思った。SDGsの取り組みをみんなですることによって、達成すればより良い未来がつくられるし、今をより良くすることと考えたから。 ・SDGsに関わる行動をすることで、<u>今当たり前にできていることがこれからもできるようになるから、より良い生活につながっていく</u>と思う。 ・SDGsは現在生活に困っている人だけではなく、<u>未来の私たちの生活を守る</u>ことにもつながる。<u>結構身近な問題もある</u>（貧困とか）。 ・地球を救えば、私たちが救われるし、意識して取り組むと私たちの存続につながるから生活とつながっていると思う。

まずエシカル消費に関する記述をみると、エシカル消費は環境のみではなく、人や地域、働く環境などをよくするということがわかったことで、その地域や社会に住む自分や家族の生活がよくなるということに気づいた生徒がいることが確認できた。また自分の今の生活が、他者が環境に配慮した行動をしたからであるということを考え、他者の行動が自分の生活につながっていることに気づけた生徒や、現在だけでなく未来の自分の生活のよりよきにつながることに気づけた生徒がいたことがわかった。

次にフェアトレードに関する記述をみると、フェアトレード商品は安心・安全かつ質の高い商品であるため、そうした商品を手に入れるということが、自分のよりよい生活につながると考えていた生徒が確認できた。また、フェアトレード商品を購入することは生産者や開発途上国の生活の質の向上につながることから、社会が安定し戦争や紛争などを減らし、結果として自身の安全が守られるため、自分のよりよい生活につながると考えていた生徒もいた。しかし、エシカル消費やSDGsと比べると、フェアトレードは自分のよりよい生活とはつながらないと考える生

徒が数名みられた。理由としては、フェアトレード商品は他の商品と比べて少々高く日常的に購入することが難しいと考えていたことが挙げられる。また、フェアトレードが開発途上国や生産者との取引であるため、エシカル消費やSDGs と比べると対象や影響が限定されていることから、他者のためという意識が強く働いたのではないかと推察される。

最後にSDGsに関する記述をみると、生徒は他の2つの内容と比べ自身の生活とのつながりを多く見出していた様子が見えられた。持続可能な社会に向けた取組みは、次世代や将来・未来のためと思われがちであり、その結果、生徒にとっては自分事として捉えにくくなる傾向にある。しかし、生徒の記述をみると、未来だけではなく、現在の自分の生活もよくなるという記述も見られ、今の自分の生活とのつながりも見出せていたことがわかった。SDGsが生活のあらゆる場面と関わる開発目標であることから、生徒が具体的な生活場面と結びつけて考えられたため、より自分事として捉えやすかったのではないかと推察される。

3つの消費行動と自分のよりよい生活とのつながりについての記述をみると、自身の生活とのつながりに結びつけて社会や環境に配慮した消費行動について考えることができている、持続可能な社会に関わる行動を自分事として捉えることができている。つまり、本実践が社会や環境に影響を与える「消費者」としての自覚の芽生えにつながったと推察される。

(2) 消費者に対する理解

また、授業後の質問調査では、「消費者とはどのような人でしょうか」と尋ねた。生徒の記述をKHcoderを利用し、共起ネットワークを作成した(図11)。

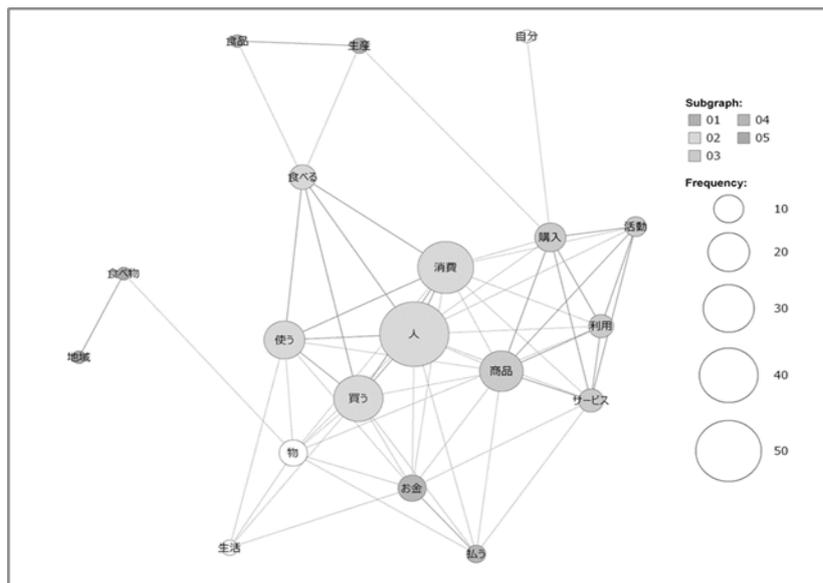


図11 消費者とはどのような人(共起ネットワーク)

図11をみると、「商品」と「買う」「購入」につながりがみられた。つまり、消費者とは、「商品を購入する、買う人」と考えている生徒がいることがわかる。また、「食べる」「使う」につながりがみられた。さらに、「使う」は、「生活」や「物」ともつながっている。具体的な記述をみると、「ものを買う人だけではなく、買って残さず食べたり、使い切ったりすることまでが消費者」という記述であった。ここから、生徒には、消費者とは商品を購入

するというだけではなく、「物を使って生活をする人」という認識があることもうかがえる。

また、「地域」という単語もみられるが、具体的な記述をみると、「地域の食べ物などを地域の人たちが消費したりする」といった、地域に目を向けた記述であった。さらに、「生産」という単語もみられたが、具体的な記述をみると、「生産者が作った食品やモノを使ったり食べたりすること」や「生産されたものを買って食べたり消費したりすること」といった、生産者を意識した記述であった。その他の具体的な記述をみると、「SDGsやフェアトレードの商品購入、エシカル消費などに取り組む人たちのこと」や「自分や社会のために商品を購入する人のこと」、「消費者とは社会や環境に配慮してモノ・コトを消費しながら生活する人」といった記述もあり、生徒は

社会に目を向けられるのが消費者であると捉えていることもわかった。

以上より、本実践を通じて、生徒の消費者の捉え方にも広がり生まれたことが推察される。特に、社会や環境に関わる消費行動を行うことが消費者であるという捉えは、本課題より、自身の消費行動と社会や環境とのつながりについて考えたことによる成果であるだろう。ここからも、生徒は社会や環境に影響を与える消費者についての理解を深めることができたと考えられる。

5. まとめと今後の課題

本研究では、批判的思考を働かせながら自分のよりよい生活と社会や環境とのつながりについて考えることを通して、消費者としての自覚を芽生えさせることをねらいとした消費者市民育成を目指した授業を実践した。エシカル消費、フェアトレード、SDGsを自分のよりよい生活と関わらせながら深く考えることで、生徒は自身の消費行動が社会に影響を与えることや、社会へ与える影響が自分の生活にも関連していることに気づけたと推察される。このような気づきは、消費者としての自覚を芽生えさせるとともに、実生活の消費行動に対する意識を変えるきっかけにもなると考えられる。

以上より、「練り直し」の学習活動を通して自身の生活と社会とのつながりを深く考えさせることにより、消費者市民の育成に寄与する学びとなる可能性があることが示唆された。

一方、今回は試行的に取り組んだ授業でもあったことで、課題も多くみられた。自身の生活とのつながりについては、例えば、エコバックを使うや節水、環境に配慮した商品の購入といった、実生活における行動に関しては具体的に考えられていたが、そうした行動が社会に影響を与えるということで、漠然と「よりよい生活になる」と考えられていたのみであった。つまり、自分の生活に具体的にどのような影響があり、どのように生活がよりよくなるのかといったところまでは考えが至っていなかった。

また、今回批判的思考を促すために、「練り直し」の場面として生徒から出された疑問や意見をもとに一度まとめた資料や発表内容の修正を行なった。しかし、この場面が批判的思考の育成につながったのか、あるいは生徒の深い理解に寄与したのかは明らかにできてはいない。今後はこれらの課題を踏まえ、授業及びデータ収集について検討をし、批判的思考に関する検証を試みたい。

引用文献

- Ennis,R.H. (1985) A logical basis for measuring critical thinking skills, *Educational Leadership*, 43, 44-48.
- 楠見孝. (2016). 批判的思考とは. 楠見孝・道田泰司(編), 批判的思考と市民リテラシー—教育, メディア, 社会を変える 21世紀スキル— (pp.2-19), 東京:誠信書房.
- 道田泰司. (2004). 批判的思考は良い思考か?. 琉球大学教育学部紀要, (64), 333-346
- 道田泰司. (2018). 叡智としての批判的思考—その概念と育成. 心理学評論, 61 (3), 231-250.
- 文部科学省. (2018). 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説, 技術・家庭編. 東京:開隆堂.
- 消費者庁. (2012). 消費者教育の推進に関する法律
https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_education/consumer_education/law/pdf/kyoiku_gaiyou2.pdf
 (2023年11月29日アクセス)

本研究は科研費若手研究 **22K13694**「消費者家庭科における自立した消費者を目指した批判的思考を育む体系的な消費者教育の検討」の助成を受けた。